

15 「東京在住作家から見た小樽の魅力」 総まとめ

私は子どもの頃から、散歩をしながら物語の構想を練ることが趣味のような、日常のような生活をしてきました。好きだから当たり前のようにやっている散歩という行為と、物語を構想することに、どんな関係があるのかということをもとに考えてみたとき、私は散歩中に自分が歩く土地に生きる自然、人間、文化を観察しているのだということに改めて気がつきました。小説というジャンルの創造物は、土地に生きる自然、人間、文化の記述なしに成立しないと言っても過言ではありません。皆様が今までに読んだ、あるいはこれから読むであろう小説のテキストを分析してみると、様々な土地の自然、人間、文化（人間がつくったもの全般をここでは広い意味で文化と表現させていただきます）の描写を基本に成り立っていることがお分かりになれると思います。

私の場合は、散歩という行為が、自然、人間、文化の観察の機会を与えてくれ、それらに反応し、頭や心の中にストックされたイメージなどがつながり、ひとつの物語ができていくということがあられるようです。小説の取材のために小樽を訪れ、そこに息づく自然、人間、文化を観察したことが、今回の寄稿につながりました。

年を重ね、行動的にも金銭的にも自立した旅行が可能になると、散歩や散策に行ける範囲も、家から近いところだけでなく、もちろん時間やお財布と相談をしながらですが、交通機関が発達した現代においては、日本の各地や海外にまで広げて考えることができるようになりました。考えてみれば非常に恵まれた話ですが、景気が悪くなってきた今の日本でも、日々の労働の疲れを取ったり、気分を変えたり、楽しみのためになど、お金持ちでなくても、様々な理由で旅行を励みに生活費を節約し、お金を貯めることができる人たちは少なくありません。そして、貯めたお金を使って地方に行くことで、地方にお金を循環させることができる。このように書くと、旅行者が優位な立場にいるように思う方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、本当はそうではなく、そこには対等な関係が成り立つし、そうでなければならぬ。なぜなら、旅行の提供者が、大きな努力をしながら仕事をし、非常に価値のあるものを与えてくれるからです。

一口に小樽や東京に住んでいると言っても、それは日本の中の、そして世界の中の一つの地域に住んでいるということを意味します。今の日本は、世界規模での人・物・お金のやり取りが相当、活発な国だと言えます。そういう状況においては、規模や機能は異なるにしても、昔の小樽の様に、経済活動が活発に行われる地域や寄港地周辺が開発され、仕事の効率化がはかられます。小樽は札幌に商圈が移り、港湾の後背にも広い土地がなく、大規模な開発が困難で、時代の波に乗り遅れたかのように一時期は言われましたが、そういうことをきっかけに札幌との分担が非常にうまくいったように思います。

それに対し、後背地の開発がうまくいった地域の生活環境は、非常に悪いと言えます。工場、コンビナート、大型道路などが建設され、近隣住民の方々が、喘息、騒音、心理的ストレスなどの健康問題で苦しんでいることも少なくありません。たとえ引っ越しをしたくても、仕

事や経済的な事情、古くから住んでいたり、ローンを組んで家を構えた土地を簡単に離れることができないことなどは、容易に想像できます。

また、景気が悪くなると、仕事のために、やはり、東京のような都会で働ける場所に住みたいという話をよく耳にします。そうすると、首都圏の飽和状態、地方の経済状況の悪化は加速する一方です。首都圏で二時間、電車に乗っても家がまばらになることがない日本のような国は、世界の中で非常に珍しいと言えます。

私が生まれ育った町田市という東京のベッドタウンでも、子どもの頃に親しんだ緑の多くが失われていきました。そんな中、失われた自然に対する喪失感、社会や無力な自分に対する失望感、あきらめの気持ちというものが、自分自身の中に相当に蓄積されていたのだということを、小樽を訪れたときの感動の大きさから推し量ることができました。

大都市やその周辺などに住む人たちは、地方に旅行に行くことで心身の疲れをとり、そこに生きる自然や人、文化に出会うという大きな価値を得る。そして、多くのことを学びながら、自分たちに失われていたものに気がついたり、生活環境を見つめなおしたりする。そういう有意義なことに使うお金が地方に循環し、それらが良質な市民生活、まちづくり、観光を行っていくための資金になる。こういうことで大都市と地方はお互いを必要としながらバランスを保つことができる。景気が上向かない今だからこそ、大きな借金をしてでも人を呼び寄せるための開発をしようという考えを持つ人たちもいるかもしれませんが、小樽という土地は、既にあるもので充分、人を呼び寄せ続けることができると思いますし、本当の価値で勝負しなくては、小樽らしくなくなってしまいます。多くの人たちに小樽の魅力を理解してもらうためには、良いからこそ守ってきたものをうまく活用し続ける、古い物に見出される新しい価値を提供する、新しいものを小樽に似合う形でつくっていく。たくましい小樽人気質を受け継いでいらっしゃる皆様なら、このような一貫した姿勢をつらぬいていける。そして、そうした一貫した姿勢こそが、小樽の信頼度を高め、継続的に訪れる小樽ファンを増やしていくことにつながっていくのではないのでしょうか。

日本の各地にできて大型ショッピングモールやアウトレットなどには、一時的には多くの人たちが押し寄せ、たくさん買い物をしていくかもしれません。しかし、そういうところに流れがちなお客さんを呼ぶために、他の地域にも似たようなものが多く建設されたら、結局、お客さんは分散し、収益は上がらなくなります。では、我が町はもっとすごいものを作らなければ、と焦れば開発の規模は拡大し、お客さんが流出して閑散とした周辺地域はさらに大きな目玉をつくろうと無理な開発を行い、最終的にはただ環境の悪化と大きな借金が地域に残り、取り返しのつかない結果を生むということが日本の各地で起きないように、日本に住む全ての人たちが気をつけなければならない時代にすでに入っているのかもしれない。

大型のショッピングモールやアウトレットでの買い物は、にぎやかで楽しいなどの良い面もありますから、一概に否定するわけではありません。しかしながら、生活や教育にはバランスが必要です。新しい物だけでなく古い物、洋だけでなく、和も残り、そこから自分が良

良いものを選び取る。良いからこそ伝統的に受け継がれてきたものに触れさせることは、次世代に生きる人たちに、自分たちにとって価値があり、必要なものが何かを考える力をつけさせるための良い教育になる。こういうことが可能な土地として、小樽は今後もその真価や内容で身を立てていくことができるのではないのでしょうか。

小樽の様に真価や内容で身を立てられる地域がたくさんあるにも関わらず、今の日本には、そういう地域に目を向けず、海外に志向が偏りすぎている人たちが、まだまだ多い様に思います。海外に行き、その土地の自然や人、文化に触れることは私も好きで素晴らしいことだと思いますが、この場合も、やはりバランスが必要です。自国やその文化について、外国人の方が詳しいなどという現象が拡大していかないためにも、日本人が自国の地方文化にもっと目を向けたとき、国内旅行の市場はさらに大きく広がります。そして、地域文化を学ぶことが、日本文化を学ぶこと、日本人としてのアイデンティティを形成していくことにまでつながっていけば、こんなに素晴らしいことはありません。

世界的な経済競争から逃れられない社会構造の中に生きる私たち。望むと望まざるに関わらず、過渡競争の中に組み込まれている現実があります。そういう時代にこそ、本当の強さとは何かということを考える必要がある。本当の強さとは、私には、困難を乗り越え、大切なことを貫く姿勢、一過性のブームで終わることなく、良質なものを提供し続けること。あるいは、他にはない個性や独自性を大切にすることなのではないかということ、小樽という土地から改めて教えられました。日本の各地域にある独自の個性や文化を大切に守っていくことこそが、日本の本当の強さなのではないのでしょうか。逆に、そうしたものが大切に守られていなければ、わざわざ地方に行く意味を感じなくなるし、日本という国も画一化した特徴のない国になってしまう。そうすると、観光においても良質のものを提供できなくなり、日本の個性、独自性に期待して海を越えてやってくる外国人観光客も減ってしまうでしょう。地方に住む方々だけでなく、私たち日本人は皆、地域や地方の文化を重要視し、日本文化を大切に守っていく使命を担っているのではないのでしょうか。日本文化を守る使命を担っているなどと、大それたことだと思う方もいるかもしれませんが、一人ひとりが地域文化を大切にすることが、そういう大きなことにつながるのであれば、自分にもできることがあるかもしれないという気がしてきます。小樽の場合は、一人ひとりが「小樽雪あかりの路」のためにできることをし、それが世界各国から人を呼び寄せ、魅了するほどの大きな成果を生んでいる。そうした積み重ねを、初心を忘れることなく続けていき、他にも小樽の良さを発揮できることを探し、展開していけば、他の地域にも良い刺激となり続けていくはずです。

地域やその文化を愛し、共に生きることを考えさせる教育が、国やその文化を愛する教育につながる。地域や国を愛する気持ちは、声高に愛せと叫べば教えられるものではないように思います。ではどうすれば良いのか？大人の背中を見せることで、また、地域や日本という国を愛する気持ちが自ずと育つことを目標とした内容の濃い教育プログラムを学校や家庭、地域社会の中で実践していくことが大切なのではないのでしょうか。

便利な生活をしがたがる現代人は、国に関係なく、地域、社会、文化を画一化させてしまうの

ではないか。自分自身が機械化された便利な生活をしながら、このままで本当に良いのだろうかという危機感を、気がつかないふりをしていたけれど、ずっと持っていたように思います。日本の歴史、文化、技術というものは、先人たちの命がけの努力の積み重ねの上に成り立っていますが、それらを失うのにたいした時間はかかりません。日本中で、文化的価値のあるものがすでに多く失われている中で、さらに多くを失って取り返しのつかない状況を招いてしまわないために、物事の価値を判断する力をつけさせるために、次世代を担う若者や子どもたちに、大切なことを教え、伝える地域の教育力が、今まさに日本中で試されているときなのではないでしょうか。小樽でも、歴史、文化、伝統を大切に守ってくれる後継者たちが、着実に育ってくれることを願ってやみません。

私が小樽から学んだ主だったことを、4点にまとめさせていただきました。

- 1 困難に打ち勝ち再生すること
- 2 大切なものを守る一貫した姿勢を持つこと
- 3 歴史から学ぶこと
- 4 地域や国、その文化を愛すること

こういうことは、もっと若いうちから学んでおくべきだ、当たり前なことだと言われればそれまでですが、こうしたことをしっかりと認識し続けることは、つつい簡単で便利な生活に流れがちな私たち現代人にとって、大人になっても難しいことのように思えます。そして、できるだけ多くの方々を知って頂きたいと思うことは、小樽がこのような大切なことを教えてくれる非常に良い場所、生涯の学びができる場だということです。

さて、この度は小樽在住の経験もなく、初めて訪れてからまだ二年目に入ったばかりの、私のような小樽初心者にも、このような発言の機会を与えていただいた「小樽ジャーナル」はもとより、長期間のご講読に預かった皆様に深く感謝申し上げます。

小樽のような、自然、人間、文化が調和していると感じた世界に出会えたことは、自分にとって運命的であり、大きな慰めや励みとも感じています。今後もどこかでこうした発言の機会を頂くことがありましたら、誠心誠意、小樽という土地の魅力についてお伝えしたく思います。

小樽に生きる方々がこれまでにしてきた努力は、初めて訪れたときから、私に大きな驚きと感動を与えてくれました。小樽には、北の大地に燦然と輝く再生の象徴、希望の星であってほしい。そんなことを考えながら、小樽舞台の小説「輝きのロザリオ」を描きました。そして、自分の中に残った小樽への慕情を表した句で、寄稿の最終回を終わらせて頂きます。「再会の街」への思いを代弁してくれるのに一番良い花だと思い、この花を最後の句に入れることを選びました。

「もう二度と わすれな草の 小樽かな」

小樽という土地に関わる全ての皆様、その土地に生きる皆様の益々のご多幸を心よりお祈り申し上げますとともに、今後も継続的に小樽を訪れ、皆様のご活躍を拝見できる日を楽しみにしております。

2010 初夏
道伝はるか